

症例 1 胃がん（ステージⅣ）

63歳，女性。2011年9月21日初診。2009年12月に胃生検の結果，GIST（消化管間質腫瘍）の診断を受け，2010年2月に胃部切除し，術後，抗がん剤の内服を行ったものの浮腫・発疹のため中止となりました。2011年6月に肝転移が発見され，肝部分切除し，別の抗がん剤の内服を行いましたが，下腹部の張満感と下肢の浮腫，倦怠感を訴えて2011年9月21日，当院を受診しました。

なお，この患者さんは，その後，2011年12月17日から副作用（全身の浮腫と発疹）が強くなり，化学療法を一時中止しましたが，その後も断続的に内服と中止を繰り返しています。

当院では，浮腫と倦怠感を目標に治療を行うことにしましたが，左関前の短脈を認め，不安感も強いいため，酸棗仁湯を加味して以下のように処方しました。

[処方]

- (1) 牡蛎 30g，磁石 30g，姜半夏 9g，枳殼 6g，蒼・白朮（各） 9g，炒酸棗仁 24g，茯神 15g，川芎 9g，知母 9g，中麻黄 4.5g，靈芝 9g，炮附子 6g，天花粉 9g，白毛藤 30g，白花蛇舌草 30g，香附子 9g，炒甘草 4.5g（分2×9日分）
- (2) 田七粉 3g，刺五加末 2g（分2×9日分）

治療経過

初診以後，炮附子と烏頭を徐々に増量し，さらに2012年4月20日以後，木鱧子の処方を開始しました。4月20日朝，口苦がみられました。脈と舌の所見は次の通りです。

〔脈診〕

	寸	関	尺
右	緊 按洪	沈滑有力	沈滑, 長
左	沈滑	沈滑	沈滑, 長

〔舌診〕 舌質暗・舌苔薄白・舌裏の静脈の怒張あり。

関前の短脈はなくなり、不安感も減少しているため、酸棗仁湯を除きました。右の寸脈は緊脈で重按無力、さらに関脈が沈滑有力の脈は飲食の習慣的な過多状態を表しています。

消塊・解鬱・補気陰・駆瘀解毒・消食を治法として、以下を処方しました。

〔処方〕

- (1) 人参 20g, 葛根 15g, 丹参 15g, 熟地黄 15g, 川楝子 9g, 延胡索 9g, 赤芍 9g, 炮附子 5g, 烏頭 5g, 白毛藤 30g, 石見穿 30g, 靈芝 9g, 焦山楂 12g (分3×14日分)
- (2) 木鼈子 30g (分3×10日分) * 10日連続服用し4日休薬。
- (3) 田七粉 3g, 刺五加末 2g (分2×14日分)

以後、再発もなく現在まで順調に経過しています。

〈コメント〉

肝転移があったにも関わらず順調に経過しうれしい限りです。人参の量が多いのは胃腸の働きを大きくしたかったからです。

症例 2	噴門がん(胃食道接合部) (ステージ I A)
-------------	--------------------------------

82歳, 女性。2013年3月19日初診。2012年12月27日, 噴門のポリープが見つかり, 細胞診で腺がんと診断されました。2013年2月13日, 胃カメラで胃食道接合部のポリープを切除しました。がんを再発しない